慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	もう一つの変身 : カフカの「あるアカデミーへの報告」について
Sub Title	Die andere Verwandlung. Über Kafkas Ein Bericht für eine Akademie
Author	川島, 建太郎(Kawashima, Kentaro)
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	2013
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.30 (2013. 3) ,p.179- 198
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20130331-0179

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

もう一つの変身

――カフカの「あるアカデミーへの報告」について[1)]

川島建太郎

1．大きなものへの変身？

「もう一つの変身」という本稿のタイトルは、1969年に出版されたエリアス・カネッティのカフカ論『もう一つの審判』にちなむものである。カネッティはこの書で、フェリーツェ・バウアー宛てのカフカの手紙を、婚約破棄をめぐる「もう一つの審判」の記録として釈義しつつ、カフカ作品における「小さなものへの変身」[2)]の意義に注意を促している。「小さなものへの変身」、例えば動物や虫への変身は、カネッティによれば、強大な権力に対する戦略である。

> 結婚を想像した時、小さなものになって消え去ることができず、そこに居なければならないことが、彼にとってもっとも辛かったに違いない。圧倒的な権力に対する不安がカフカの中心にあり、それから自分の身を守る手段が、小さなものへの変身である。［中略］できるかぎり消え去ることによって、不当な暴力から逃れなければならない。非常に小さくなったり、昆虫に変身したりするのは、冷酷さや殺害によって他の人々が罪を負うことがないようにするためである。[3)]

---

1) 本稿は2012年11月17、18日に慶應義塾大学三田キャンパスにおいて開催されたシンポジウム *Postdarwinismus oder: Quo vadis humanitas?* において発表した講演原稿を翻訳し、当日の討議をふまえて加筆修正したものである。

2) Elias Canetti: *Der andere Prozeß. Kafkas Briefe an Felice*, München 1973, S. 41.

3) 同上。

小さなものへ変身するのは、権力に捕捉されることを回避するためである。このように見るならば、例えばグレーゴル・ザムザの変身は、実存主義的な不条理とはまったく関係を持たない。主体が権力の介入をかわそうとするために行なう政治的な行為としてとらえれば、この変身はむしろまったく論理的である。カフカを権力問題の熟知者として理解するカネッティは、カフカの動物譚に内在する政治的次元を見出したのである。

1975年刊行のドゥルーズ／ガタリによるカフカ論は、間違いなくカネッティのカフカ解釈に連なるものである。カネッティの視点の継承は、注の一つで『もう一つの審判』への言及があることだけではなく、「マイナー文学について」という副題にも現れているように思われる。[4] 彼らはカネッティに倣って、カフカ文学における動物への変身を「出口を見出し、逃走の線を描く」[5] こととして理解し、『アンチ・オイディプス』以来彼らの鍵概念となった「非領域化」[6] と結びつけ、その具体的な実例としてとらえる。つまり、動物への変身は彼らにとって一つのノマド的運動である。[7] このよう見たとき、カフカの動物譚の根底にあるのは実存の不条理などではなく、マイナーな存在の政治的戦略である。

カフカの動物譚のこのような解釈史を背景にして、「あるアカデミーへの報告」[8] で物語られる変身は何を意味するのか、という問いを立てるこ

---

4) ジル・ドゥルーズ／フェリックス・ガタリ『カフカ——マイナー文学のために』、宇波彰／岩田行一訳、法政大学出版局、1978年、83頁。
5) ドゥルーズ／ガタリ『カフカ』、67頁。
6) ドゥルーズ／ガタリ『カフカ』、20頁。
7) ドゥルーズ／ガタリ『カフカ』、67頁。「動物になること」の政治学については、ドゥルーズ／ガタリ『千のプラトー』の第10章「1730年——強度になること、動物になること、知覚しえぬものになること・・・」も参照。また、ドゥルーズ／ガタリは『群衆と権力』の著者としてのカネッティにも着目していたことを想起しておきたい。ジル・ドゥルーズ／フェリックス・ガタリ『千のプラトー——資本主義と分裂症』、宇野邦一他訳、河出書房新社、1994年、126頁を参照。
8) 「あるアカデミーからの報告」からの引用は、Franz Kafka: *Drucke zu Lebzeiten*, hg. v. Wolf Kittler, Hans-Gerd Koch und Gerhard Neumann, in: Franz

とができる。というのもこの物語は、少なくとも第一印象では、「小さなものへの変身」ではなく、むしろその反対に《大きなものへの変身》を問題にしているように見えるからである。物語られるのはつまり、5年ほど前にアフリカ黄金海岸でハーゲンベックの狩猟隊に捕獲されたチンパンジーが、狭い檻に耐えられず猿であることを止める決意をし、人間を模倣することによって言葉を話す存在へと変身する過程である。群れの中の一匹であった猿が人間に捕獲されてロートペーターなる名を受け、ヴァリエテの人気者として人間社会で暮らす存在へと変身する。このような粗筋のレヴェルにおいてロートペーターは、虫になったグレーゴルとは逆方向に、大きなものへ変身しているように見えるのである。

猿から人間の言葉を話す存在への逆方向の変身は、すぐさま進化論を連想させる。カフカがダーウィンやヘッケルを青年時代から読んでいたことも、[9] このような観念連想を強化する一因である。テクストの内部にも外部にも進化論との直接的な関係を示す記述は存在しないが、カフカ研究者は度々この関連を指摘してきた。[10] そのような指摘が正当かつ生産的であることは間違いないが、他方でロートペーターは本当に人間になったのかどうか、実はそれほど簡単に判断できないという問題があることを忘れるべきではない。ロートペーターは確かに「猿であることを止め」(304)、「人間社会に飛び込んだ」(311)、とはっきり述べている。そもそもアリストテレスの『政治学』以来、「動物のうちで言葉をもっているのはただ人間だけ」[11] であるとされるが、ロートペーターはまさにその言葉を駆使し

Kafka: Schriften, Tagebücher, Briefe. Kritische Ausgabe, hg. v. Jürgen Born u.a., New York/Frankfurt a.M. 1994, S.299-313.に拠る。以下では、同作品からの引用は本文中にページ数のみを記す。

9) Hartmut Binder: *Kafka. Der Schaffensprozeß*, Frankfurt a.M. 1983, S.160. リッチー・ロバートソン『カフカ』、明星聖子訳、岩波書店、2008年、49頁。

10) Andreas B. Kilcher/Detlef Kremer: Die Genealogie der Schrift. Eine transtextuelle Lektüre von Kafkas „Bericht für eine Akademie“, in: Claudia Liebrand/Franziska Schößler (Hg.): *Textverkehr. Kafka und die Tradition*, Würzburg 2004, S.45-72, S.58.

11) 『アリストテレス全集15』、山本光雄訳、岩波書店、1969年、7頁。

て「報告」を行ない、さらには「ヨーロッパ人の平均的な教養」(312)を身につけたとすら主張している。だが「報告」のどこにも、ロートペーターが《自分は人間である》と主張する個所はないのである。

その上この「報告」には、ロートペーターが人間とは異なる存在であることをうかがわせるような事実も盛り込まれている。つまり、彼の夜の生活は「猿の流儀にしたがって」営まれるのである。

> 宴会や学術的な会合やくつろいだ集いから夜遅くに帰宅すると、調教半ばの可愛い雌チンパンジーが私を待っています。そして私は猿の流儀にしたがって彼女のもとで懇ろに過ごすのです。(313)

セクシュアリティーはフーコーによれば、近代の告白における「特権的な題材」[12]である。アカデミーを前にして「率直に(offen gesprochen)」(300)、あるいは「率直な言葉(das offene Wort)」(300)で自伝を語るロートペーターもまた、自分のセクシュアリティーを秘匿することはない。彼は調教中の雌猿が恋人であるが、昼間は彼女の存在に耐えられない(313)という興味深い事実を打ち明ける。ロートペーターは己の猿性からの脱却が不完全であるという疑念、つまり彼がもっとも恐れ、この「報告」のなかで否定しようと躍起になる疑念を生じさせるかも知れぬという危険をあえて冒してすら、主体をめぐる隠された真実を開示するという、アウグスティヌス『告白』以来の自伝的ディスクールのルールに忠実であろうとしている。[13]

ともあれ、ロートペーターがグレーゴルとは逆方向に変身した存在であることは確かである。猿であった彼は沈黙という自然の壁を突き抜け、平均的ヨーロッパ人と同等の教養を身につけたと人間言語で「報告」してい

---

12) ミシェル・フーコー『性の歴史Ⅰ——知への意志』、渡辺守章訳、新潮社、1986年、79頁。

13) ロートペーター自身の言葉によれば、「すべてが率直にさらけ出されています。隠してもよいことなどありません。真実がかかっているとなれば、気高い志操をもつ者は皆、最も洗練された作法すら投げ捨てるのです」(302)

る。しかし、それゆえに彼は人間であると見なされうるのか、それともそうではないのか、この決定的に重要なはずの判断を下すことが困難であるという点にこそ、この「報告」の最大の問題がある。「あるアカデミーへの報告」を唯一進化論の関係からのみ解釈しようとすると、このような曖昧さを抹消して、猿から人間へと進化したロートペーターの物語へとテクストを単純化してしまう危険性がある。はたして本当にロートペーターは、一瞥してそう見えるように《大きなものへの変身》を語っているのだろうか？ 彼の「報告」をより詳細に検討してみなければならない。

2.ミメシスか、猿真似か？

窮屈な檻から出たいがために、ロートペーターは猿であることを止める決意で、アフリカからハンブルクへの輸送船のなかで彼をとりまいている人間たちを模倣しはじめる。「報告」によれば、「人々を模倣することはとても簡単であった」（308）彼はこのような模倣、すなわちミメシスによって、檻を脱して人間社会に入ろうと試みるのである。[14] すぐに彼は唾を吐くことやパイプを吸う仕草を身につけた。かなり厳しい訓練を経て、蒸留酒（geistige Getränke）への嘔吐感も克服し、「ハロー！」と叫びながら「人間社会に飛び込んだ」（311）のである。

ロートペーターが言語界に入ってゆく場面では、背景で「グラモフォン」（310）が鳴り響いている。そのため、メディア理論をふまえたカフカ解釈者たちは、蓄音機の発明にまつわるエピソードがこの描写の下敷きになっていると指摘している。まず、1877年にトマス・アルヴァ・エディソンが、電話を発明しようとする過程でつくりあげた蓄音機に初めて記録し再生させた言葉がまさに「ハロー」であったという事実がある。[15] さらには、1878年にエディソンの助手がアカデミー・フランセーズの前で蓄音機を披露したとき、再生されたのは「蓄音機は学術アカデミーの前で実演され

---

14) Vgl. Gerhard Neumann: „Ein Bericht für eine Akademie“. Erwägungen zum ‚Mimesis‘-Charakter Kafkascher Texte. In: *Deutsche Vierteljahrschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte 49*, 1975, S.166-183.

15) Friedrich Kittler: *Grammophon, Film, Typewriter*, Berlin 1986, S.37.

ますことを、大変な名誉だと感じております」という言葉だったという。[16] この物言いはもちろん、「あるアカデミーへの報告」の冒頭部を想起させずにはいない。そうであるならば、この物語のセッティング自体が、蓄音機の発明にまつわる逸話をトレースしていることになる。ヴォルフ・キットラーは以上の関連を指摘しつつ、「報告」は「メディア技術とダーウィン主義的進化論とからなる緊張圏域」にあると述べる。[17] この物語はつまり、19 世紀末に発明された蓄音機というアナログのメディア技術による再現を、ダーウィン以降、再考されなければならない問題としての猿によるミメシス——あるいは《猿真似》（Nachäffen）——の問題と絡めているのである。文脈は異なるものの、『1900 年頃のベルリンの幼年時代』におけるヴァルター・ベンヤミンも似たことを試みている。ベンヤミンは『幼年時代』のなかの「ムンメレーレン」において、写真というアナログのメディア技術による再現を背景において、子供の模倣の能力を描いているからである。[18]

ロートペーターの模倣は、明らかにイロニーの対象となっているように見える。というのも彼の自然から文化への移行は、唾吐き、喫煙、飲酒の模倣や、蓄音機の発明により技術的に反復可能となった「ハロー」の模倣によって表現されているからである。ロートペーターの模倣はそれゆえ、《猿真似》という語を連想させずにはいない。しかしながら「報告」によれば、ロートペーターの言語習得はまさにこの猿真似的模倣を通じて行なわれている。カフカにおいては、猿真似的模倣と言語能力が直接つながっており、動物の模倣と人間の模倣、そして言語能力が、本質的に異なるも

---

16) Wolf Kittler: Schreibmaschinen, Sprechmaschinen. Effekte technischer Medien im Werk Franz Kafkas, in: ders./Gerhard Neumann (Hg.): *Franz Kafka. Schriftverkehr*, Freiburg 1990, S.75-S.163, S.155.

17) 同上。Vgl. auch Walter Bauer-Wabnegg: Monster und Maschinen, Artisten und Technik in Franz Kafkas Werk, in: Wolf Kittler/Gerhard Neumann (Hg.): *Franz Kafka. Schriftverkehr*, Freiburg 1990, S.316-382, 350f.

18) この関連については拙論「ミミクリーの美学——ベンヤミンの自伝的テクスト『ムンメレーレン』と『蝶を追う』について」『思想』No. 1030、2010 年第 2 号、88–102 頁を参照。

のではなく、単に段階的な差異をなしているにすぎないかのようである。

この点においてロートペーターの「報告」は、西洋の伝統的なミメシス概念[19]を根底から揺さぶるものである。古典的ミメシス概念の一例としてアリストテレスの『詩学』から一節を引用する。

> さて、一般に詩の技法が生れるに至った原因として二つ程大きなものがあると思われるが、その二つとも自然的本能であると思われる。すなわち、先ず模倣(ミメイスタイ)して再現することであるが、これは人間には子供の頃から自然に備わった本能であって、人間が他の動物と異る所以も、模倣再現に最も長じていて、最初にものを学ぶのもまねびとしての模倣(ミメーシス)再現によって行なうという点にある。次にまた、模倣して再現した成果をすべての人が喜ぶということ、これが第二の原因であるが、これも自然に備わった本能である。[20]

アリストテレスはこのように、ヨーロッパ詩学の始源をなすテクストにおいて、人間を動物から分かつ能力として「模倣再現」をとらえている。こうしたミメシス概念に対して真っ向から疑義をつきつけるかのように、ロートペーターは動物の模倣と人間の言語能力は通底していることを「報告」している。というのも、彼は猿に「自然に備わった本能」としての「まねびとしての模倣再現」による学習を通じて「ヨーロッパ人の平均的教養」レヴェルへ到達し、ついには「あるアカデミーへの報告」を提出する能力まで身につけたのである。

この文脈においてカフカは、ニーチェと非常に近い立場をとっている。[21]例えばニーチェの遺稿には次のような書き込みがある。「真似るという猿的なことが、固有かつ最古の人間的なことである［中略］。いかなる動物

---

19) ミメシス概念史については次の文献を参照。Gunter Gebauer/Christoph Wulf: *Mimesis. Kultur, Kunst, Gesellschaft*, Reinbek 1992.

20) 『アリストテレス全集 17』、今道友信他訳、岩波書店、1972 年、23 頁以下。

21) カフカとニーチェの多角的な関係については次の論集を参照。Friedrich Balke/Joseph Vogl/Benno Wagner (Hg.): *Für Alle und Keinen. Lektüre, Schrift und Leben bei Nietzsche und Kafka*, Zürich/Berlin 2008.

も人間ほどには猿ではない。――」[22] 猿と人間の連続性が想定されているという意味で、これはまさしく進化論以降の命題である。着目するべきは、ここでも人間と猿が分かち合うのは「真似る」（Nachmachen）という能力であることだろう。この観点におけるニーチェとカフカの接近は見紛いようがない。さらに、「あるアカデミーへの報告」には、『道徳の系譜学』からの引用が複数存在することも思い起こしておく必要がある。[23] なぜならこの著作でニーチェは、人間を道徳によって「調教」された動物として描きだしているからである。[24] このような系譜学的パースペクティヴから眺めれば、模倣による教養習得の背後には野獣の調教が隠れていることが浮かび上がってくる。ロートペーターのミメシスが、多数の教師とともに行なわれた厳しい調教もしくは「自己調教」[25] の成果であったことは「報告」の内容に確実に盛り込まれている。したがってロートペーターが次のように述べるとき、「猿的なこと」と「人間的なこと」とを模倣という契機で短絡させた上記のニーチェ引用を、身をもって実演していると読むことが可能である。「皆様、あなたがたがそのようなものを乗り越えてきたとすればですが、あなたがたの猿性と今のあなたがたとの間の距離は、私の猿性と今の私との間の距離よりも大きい、ということはありえません」（300）模倣への（自己）調教によって「ヨーロッパ人の平均的教養」レヴェルに達したと自負するロートペーターは、厳しい訓練によって自分が克服した猿性と同様に、人間の系譜学的過去としての猿性についても思いめぐらさざるをえないのである。

以上の考察を経て、「報告」された猿の模倣による教養（ビルドゥング）のプロセスには、理論的な含意として少なくとも次の２点があることがわかる。第１に猿も、

---

22) Friedrich Nietzsche: *Nachlaß 1880-1882*, in: ders.: *Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe*, hg. von Giorgio Colli/Mazzino Montinari, München 1999, Bd.9, S.55.

23) Kilcher/Kremer: a.a.O., S.58-61.

24) Friedrich Nietzsche: Zur Genealogie der Moral, in: ders.: *Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe*, hg. von Giorgio Colli/Mazzino Montinari, München 1999, Bd.5, S.323.

25) Erhard Schüttpelz: Eine Berichtigung für eine Akademie, in: Arne Höcker/Oliver Simons (Hg.): *Kafkas Institutionen*, Bielefeld 2007, S.91-118, S.100.

古典的なミメシス概念が人間に固有であるとしていた能力を十分に備えており、訓練の如何によって人間と同等の教養レヴェルに到達することができる。この観点は、人間の教養や文化もまたある種の調教の成果にほかならないという系譜学的見方と表裏である。『人間園の規則』の著者スローターダイクはまさにこのようなパースペクティヴからカフカの「断食芸人」を読解している。[26] 第２に、模倣はプラトン以来ながらく類似性の概念によって思考されてきたが、「報告」の模倣は逆に差異の産出をもたらす。模倣はここでは反復であり、反復は否応なく差異を生み出す。ロートペーターは人間の模倣によって、猿であることを止めて非領域化する。「あるアカデミーの報告」は、このように伝統的なミメシス概念の転倒を含んでいるのである。

ここで再度、本稿の出発点となった変身の政治性の問いに戻ろう。ロートペーターの模倣による学習は一見確かに、カネッティやドゥルーズ／ガタリが着目したマイナーの政治戦略としての「小さなものへの変身」とは反対である。それはむしろメジャーの権力との同一化であるように見える。しかし、ニーチェをふまえたミメシス概念の検討の過程で見えてきたように、ロートペーターの模倣による人間への同一化には、人間の動物化が含意されている。猿が人間化するとき、同時に人間は動物化するのである。言語と教養を身につけた猿としてヴァリエテのスターとなったロートペーターは「自分の出番の前に、2 人組の演技者が天井近くで空中ブランコ芸をやっているのをみた」（304）が、この様を見たら猿たちは「爆笑」（305）するだろうと述べる。[27] こうした人間の猿化と猿の人間化の同時性という観点まで考慮に入れたとき、ロートペーターの変身は、ただ単に大きなものへの変身として、グレーゴル・ザムザの「小さなものへの変身」と対立しているわけではない。むしろ、《もう一つの変身》となる契機を持っているのである。

---

26) Peter Sloterdijk: *Du mußt dein Leben ändern*, Frankfurt a.M. 2011, S.100-117.

27) もう一つの例を挙げる。「報告」の文面にもとづけば、猿であることを止めた自分をロートペーターなどと命名したのは、彼と「最近くたばった、そこそこ有名な調教された猿ペーター」（301）との差異を頬の赤い斑痕にしか認められない「正しく猿」（同上）の仕業である。

ドゥルーズ／ガタリはもちろんこの点を見逃してはいない。

> カフカが動物を記述するテクストが、われわれが語るよりもはるかに複雑なことは事実である。あるいはむしろ逆に、はるかに単純である。たとえば、「あるアカデミーへの報告」のなかでは、人間の動物への変化ではなく、猿の人間への変化が問題とされる。この変化は、単純な模倣として描かれる。そして、よしんばひとつの出口を見出すことが問題であるとしても（それはひとつの出口であって《自由》ではない）、この出口はけっして逃げることから成るのではなく、その逆である。しかし一方では、逃走は空間のなかでのむだな運動、自由を装う運動としてひたすら忌避される。逆に逃走は、その場での逃走として、強度における逃走として肯定される。［中略］他方、模倣は外見的なものにすぎない。なぜなら、問題は形象を再生産することではなく、猿が人間になるのに劣らず人間が猿になる場である。非平行的で対称的でない進化のなかでの、強度のひとつの連続体を生産することだからである。[28)]

ドゥルーズ／ガタリが指摘しているように、カフカにおいて変身とは線状に一方向に向かって不可逆的に進展する過程ではない。カフカの物語世界で問題とされている変化は、下等な動物からより上等な動物への目的論的な発展ではなく、生成変化（Werden）という「強度のひとつの連続体」であり、そのような生成の渦巻きのなかでは、人間が動物になることなしに、動物が人間になることはない。「報告」のなかでは、とりわけ次の苛酷な「自己調教」を語る個所が、渦巻く生成のダイナミズムを直截に表現している。

> そして皆様、私は学びました。ああ、学ばねばならないとなれば、学ぶものなのです。学びますとも、出口を欲するのであれば。容赦なく学びます。鞭をもって我が身を監督します。ほんのわずかでも抵抗す

---

28) ドゥルーズ／ガタリ『カフカ』、22 頁。

るようならば、我が身を苛みます。猿の本性は、勢いよく転がりながら私の中から飛び出して逃げ去りました。私の最初の教師はそのせいで自分が猿のようになり、やがて授業を放棄して、精神病院に連れていかれるほかはありませんでした。(311f.)

求道者のような真剣さで人間の模倣を学ぶロートペーターの変身が、彼の教師の猿への変身を誘発する。これは非常に重要な点だが、変身はカフカの物語世界において、孤立した一つの出来事にとどまることはない。グレーゴル・ザムザの物語は、それを典型的に表わしている。彼がある朝、毒虫に変身したのに続いて、彼の家族も次第に変身してゆくのである。父親は再び仕事を始め、家でも金ボタンの制服を脱ぐことはないし、妹は販売員として仕事をしながら、夜はフランス語と速記を勉強して、将来はもっとよい職に就こうと励む。一つの変身に別の変身が次々と結びつき、物語世界は生成変化という「強度のひとつの連続体」として現出する。その結果、客観的な測量を可能にする確固たる定点などどこにも存在しないのである。

3.ミメシスか、ミミクリーか？

しかし、問題はさらに複雑である。ロートペーターのミメシスは古典的なミメシス概念では捉えられないばかりか、さらにはミミクリーでもあるからである。[29)]「報告」を一読すれば、彼の模倣の目的は「出口」(303)の探求であることは明白である。ロートペーターは自分にとって重要なのは檻からの「出口」あるいは「逃げ道」(Ausweg)であり、「自由」(304)——「自由」は彼には人間の自己欺瞞以上のものに見えない——ではなかったことを執拗に強調している。彼はこの一見微妙な区別に拘泥する。なぜならば、彼は模倣によって人間的な自由と自律の権利を獲得しようとしたわけではなく、檻から出て人間社会で生活することを許される程度まで環境に順応することを目指していただけだからである。つまり彼の模倣は人間世界で生き延びるためのミミクリーである。「報告」の次の個所は、このようなロートペーターの模倣の二重性、ミメシスとミミクリーの同時

29) Vgl. Neumann: a.a.O., S.176f.

性を端的に表現している。

> この進歩の凄いことといったら！ あらゆる方向から覚醒しつつある脳の中へ、知の光が射し込んでくるのです！ それに幸せを感じたことを、私は否定しません。［中略］これまでこの世で二度と繰り返されたことのない努力によって、私はヨーロッパ人の平均的教養に到達しました。それは、それ自体としては、もしかしたらまったくの無であるかもしれませんが、私が檻から出る手助けをしてくれ、この特別な出口、この人間という出口を開いてくれたという意味で、やはり幾ばくかのものではあるでしょう。ドイツ語には、藪に分け入り姿をくらます（sich in die Büsche schlagen）という素晴らしい慣用句があります。 これを私はやったのです。藪に分け入って姿をくらましたのです。自由を選択することはできないということが常に前提となっていたので、他には道はありませんでした。（312）

ロートペーターの教養は、彼の模倣によってますます深まってゆくが、それは同時に「藪に分け入る＝姿をくらます」という動物の擬態的な行動でもある。ノイマン／ヴィンケンが「あるアカデミーへの報告」を「教養小説のカリカチュアー」[30] と呼んでいるように、ロートペーターの教養修業は、人文主義の理想と伝統から遠く隔り、生き残るために環境に適応するためのミミクリーであるという側面を持つ。「藪に分け入る＝姿をくらます」ために教養を身につけるのであれば、ロートペーターによる人間の模倣は、同時にその反対への志向を含み持つ。すなわち、ロートペーターの大きなものへの変身は、同時に「小さいものへの変身」を含意している。まさにこのようなパラドクシカルな理由からも、「あるアカデミーへの報告」は《もう一つの変身》なのである。このテクストが、一瞥したかぎりでは動物への変身を扱っていないにも関わらず、カフカのその他の動物譚

---

30) Gerhard Neumann/Barbara Vinken: Kulturelle Mimikry. Zur Affenfigur bei Flaubert und Kafka, in: *Zeitschrift für deutsche Philologie*, Sonderheft zu Band 126: *Tiere, Texte, Spuren*, hg. von Norbert Eke/Eva Geulen, 2007, S.126-142, S.138.

と接点をもつとすれば、それは「出口」あるいは「逃げ道」を確保するためのミミクリーである。

「報告」を読んだマックス・ブロートはすでに、このようなミミクリーの意義に勘づいていたようだが、それは同化ユダヤ人問題を背景としてこの物語を読んだことによる。

> フランツ・カフカはハーゲンベックに捕獲され、むりやり人間になる猿の話を物語っているだけだ。だがなんとひどい人間になることか。懸命に媚びへつらって努力した結果、その猿は人間という種族のうち最低のくずになるのである。これこそ、今まで書かれたうちでもっとも素晴らしい同化の風刺ではなかろうか！『ユダヤ人』の最新号で、もう一度これを読んでみてほしい。同化する者が求めているのは自由や無限ではなく、一つの逃げ道、みすぼらしい逃げ道にすぎないのである！　この同化者はグロテスクであると同時に崇高でもある。なぜならば動物人間喜劇の背後には、求められずとも、神の自由がさし迫ってきているからである。[31)]

ブロートがカフカの物語に読み込もうとしているのは、同化ユダヤ人の批判とシオニズムへの志向である。そのような解釈の是非はさておき着目するべきは、ブロートがロートペーターの「報告」を理解する際の言説史的な枠組みである。1917年にマルティン・ブーバーの雑誌『ユダヤ人』に掲載されたこのテクストは、同時代の同化ユダヤ人をめぐる差別的言説のなかで読解されている。より具体的に言うと、ユダヤ人の同化を、非ユダヤ人の立場からミミクリーの概念でとらえることによって差別した1900年前後の社会ダーウィニズム的・レイシズム的ディスクールのなかで読まれている。[32)] この言説において、啓蒙主義時代以降にミミクリーによってゲットーから脱出したユダヤ人は、陰謀論のロジックにしたがって、ヨー

---

31) Jürgen Born (Hg.): *Kafka. Kritik und Rezeption zu Lebzeiten, 1912-1924*, Frankfurt a.M. 1979, S.128.

32) Vgl. Kilcher/Kremer: a.a.O., S.64f.

ロッパの危機であるとされる。[33] ブロートはロートペーターの、模倣によって教養を身につけ、人間と同化することによって「藪に分け入り姿をくらます」というパラドクシカルな試みを、このような1900年前後以来のユダヤ人にとって極めて緊迫した政治言説領域の中へ位置づけている。このように見たときロートペーターは、社会ダーウィニズム的・レイシズム的ディスクールを逆手に取り、ミミクリーという概念のもとに政治争点化されていた、同化によって檻からの「出口」を見つけるというマイナーの政治戦略を上書きしているのである。

このような意味でのミミクリーは、ロートペーターによる人間の模倣が、古典的ミメシス概念から逸脱してゆくもう一つの契機である。ゲーバウアー／ヴルフは『ミメシス』の結論部で「人間学的観点からすると、ミメシスは人間を動物から区別する能力であると見なされる」[34] と記す。彼らはプラトンからアドルノ、デリダに至るまでミメシス概念の歴史をたどった上でなお、アリストテレスの古典的なミメシス定義の妥当性を確認しているのである。そのような立場からすれば首尾一貫しているのだが、彼らはミミクリーを動物の能力とみなした上でミメシスから峻別し、ミミクリー概念にはほとんど注意を向けていない。つまり西洋の伝統的な人間学の視座からすると、ミメシスとミミクリーは厳密に区別されねばならず、その区別は人間と動物の存在論的区別と連動しているのである。それ対してロートペーターの模倣は、人間と同一化し、教養を身につけるためのミメシスであると同時に「藪に分け入り姿をくらます」ミミクリーである。[35]

古典的なミメシス概念に依拠するままの人間学では、ミメシスとミミク

---

33) Vgl. Kilcher/Kremer: a.a.O., S.65. さらにキルヒャー／クレーマーは、他方でシオニズム陣営による同化ユダヤ人批判もまた、同様に「猿的なミミクリーの隠喩法」を用いていたと指摘している。もっとも彼らが挙げる例証では、猿真似とミミクリーが区別されておらず、必ずしもミミクリーの概念を正確に用いているとは言えない。Vgl. Kilcher/Kremer: a.a.O., S.67.

34) Gebauer/Wulf: a.a.O., S.435.

35) 「繰り返しますが、人間を模倣することに心惹かれたわけではありません。私は出口を探していたので、模倣をしたのです。他に理由はありません」（311）

リーを同時に行なう報告者ロートペーターが、人間であるのか動物であるのか判断することはできないであろう。ドゥルーズ／ガタリやスローターダイクの問題提起を受けとめつつ、アガンベンが「人類学機械」[36] と呼んだもの、すなわち人間が自ら動物との境界線を引くことによって自己規定する言説のメカニズムは、この「報告」によって機能不全に陥る。「あるアカデミーへの報告」はすぐれてポスト進化論の時代の動物譚である。なぜならここでは、猿が人間になることと人間が動物になることとが同時に生起するという非目的論的変身が語られるとともに、模倣——ミメシスとミミクリー——を契機とした人間と動物の境界の問題化が、物語の核心部を形成しているからである。

4.「判断＝判決」の問題——自伝と法廷

ロートペーター自身が自己のパラドクシカルな存在に自覚的であることは、「報告」を締めくくる文章からも察知することができる。

> 全体として見れば、私は達成したいと欲していたことを達成しました。それは努力する価値のなかったものである、などとは言わないでいただきたい。ついでに言えば、私は人間の判断を望んでいるわけではありません。ただ知見を広めたいだけ、ただ報告しているだけなのです。高邁なるアカデミーの皆様、あなた方に対しても、私はただ報告しただけです。（313）

原語では「判断」（Urteil）は「判決」でもあることは言うまでもあるまい。カフカ作品では「判決」が致命的な厄災であることは、同名の物語の結末が如実に示すところである。また「流刑地にて」も、カフカにおいて「判決」が残酷な結末と結びつく典型的な例である。動物譚では、「あるアカデミーへの報告」と同じ八つ切り判ノート D に含まれている「雑種」が同様である。この物語の語り手が自問するところによれば、「半分子猫で半

36) ジョルジョ・アガンベン『開かれ——人間と動物』、岡田温司／多賀健太郎訳、平凡社、2004 年、59 頁、118 頁。

分子羊という独特な動物」[37] にとっては、もしかしたら「肉屋の包丁が救済」[38] なのかもしれない。カフカ文学に特有なパラドックスとしての動物、「アノマリー、奇形、混合、ハイブリッド」[39] としての動物を一刀両断に断ち切る——分類＝解決する——かもしれぬ「肉屋の包丁」は、ほとんど必然的に『審判』の最後のシーンを連想させる。このような文脈を顧慮すれば、ロートペーターが「判断を望んでいるわけではない」ことは当然のことである。

けれども望むと望まないに関わらず「報告」は、この報告者は人間であるのか猿であるのかという問題提起を内在させており、それによって「判断＝判決」を誘発しかねない、という行為遂行的矛盾がある。彼の「報告」はアカデミーのアーカイヴにもとづかない前代未聞のスキャンダルな内容であるし、さらにはそもそもその発話状況からして、「報告」された逆説的存在についての「判断＝判決」を挑発してしまうのである。というのもアカデミーに対して自伝を物語るという発話状況は、権威的審級を前にして自己の行為を説明、あるいは釈明する法廷における発話状況と同一の配置だからである。そして言うまでもなく法廷のモデルは、『審判』をはじめとするカフカ作品で中心的な役割を果たしている。本稿の出発点となったカネッティのカフカ論のタイトルが『もう一つの審判』であることを、ここでもう一度想起してもよい。

自伝というテクスト種の歴史を振り返れば、このような司法制度との親近性はけっして偶然ではないことがわかる。例えばプラトン『ソクラテスの弁明』が示すように、法廷での自己弁明は自伝的自己描写の起源の一つである。[40] さらには自伝と法廷の結びつきを示す典型的な例として、ルソ

---

37) Franz Kafka: *Nachgelassene Schriften und Fragmente I*, hg. v. Malcolm Pasley, in: Franz Kafka: *Schriften, Tagebücher, Briefe. Kritische Ausgabe*, hg. v. Jürgen Born u.a., New York/Frankfurt a.M. 1993, S.372.

38) Kafka: *Nachgelassene Schriften und Fragmente I*, S.374.

39) Vgl. Marianne Schuller: Lauter Kreuzungen. Zur Poetik des Unreinen bei Kafka, in: Anne von der Heiden und Joseph Vogl (Hg.): *Politische Zoologie*, Zürich/Berlin 2007, S.15-22, S.17.

40) Martina Wagner-Egelhaaf: *Autobiographie*, Stuttgart 2000, S.102f.

ーの『告白』第一巻を挙げることができる。

> 最後の審判のラッパがいつ鳴ってもかまわない。私は手にこの書物を持って、最高の審判者のまえに出ていこう。私は声高くこう言うだろう。これが私のやったことです。考えたことです。かつての私の姿です。私は善も悪も同じように率直に語りました。[41)]

ルソーが属するアウグスティヌス以来の伝統において、自伝とはけっして自己について無碍に語ることではない。潜在的には常に、神であれ法廷であれ、「判決」を下す能力のある権威的審級——精神分析学的パースペクティヴから言えば父なる審級——を前にして己について嘘偽りなく「率直に」打ち明けることである。

こうした自伝に潜在する特有な発話状況が、ロートペーターによるアカデミーに対する「報告」において反復されている。[42)] つまりこのテクストはその語りの状況からして、「報告」を読む読者が、ロートペーターの自伝に耳を傾けているアカデミー会員たちのポジションを占めるように設計されている。それはすなわち、「報告」の各々の読者がアカデミーの構成員の一人として、ロートペーターは本当に猿であることを止めることに成功したのかどうか、彼の人間化ははたして真正なものであるのか、という問いに取り組まなければならない、ということを意味する。ロートペーター自身はあくまでも「報告しただけ」であり、自らの「報告」に内在する問いへ答える立場にはないことに自覚的である。彼の《もう一つの変身》は——グレーゴル・ザムザの『変身』と同様に——アカデミーがこれまで収集してきた人間学的知によっては把握されえない一つの事例として、パラドクシカルな謎であり続ける。この謎を解明し、「判断＝判決」を下すべき立場にあるのは、テクストの構成上アカデミー会員であり、その席に

---

41) 『ルソー全集 1』、小林善彦訳、白水社、1979 年、13 頁以下。

42) アカデミーの要請に応える形で自伝を書いたフランツ・グリルパルツァーの自伝も「あるアカデミーへの報告」のプレテクストのひとつとして指摘されている。Vgl. Kilcher/Kremer: a.a.O., S.57.

座している読者であるが、審議はいまもって継続中であり、討議はおそらく今後も続くであろう。《もう一つの変身》は、「小さなものへの変身」と同様に、把捉し「判断＝判決」を下さんとする知と権力の網の目をどこまでもすり抜けてゆくかのようなのである。

（慶應義塾大学文学部独文専攻准教授）

Die andere Verwandlung. Über Kafkas *Ein Bericht für eine Akademie*

KAWASHIMA, Kentaro

In seinem Kafka-Buch *Der andere Prozeß* weist Canetti auf „die Verwandlung ins Kleine“ als politische Dimension in Kafkas Texten hin: Die Verwandlung ins Tier stellt ihm zufolge eine Strategie gegenüber der Macht dar. Im Anschluss an diese Lesart erläutern Deleuze/Guattari das Tier-Werden, das Kafkas Erzählungen eigentümlich ist, als Politik der Minderheit. Mit Blick auf diese Kafka-Rezeption stellt sich nun die Frage: Worum geht es, wenn *Ein Bericht für eine Akademie* nicht von einer Verwandlung ins Tier, sondern von der Verwandlung eines Affen zu einem die Menschensprache sprechenden Wesen handelt? Die vorliegende Arbeit befasst sich mit der Frage dieser anderen Verwandlung Rotpeters, die die umgekehrte Richtung nimmt im Verhältnis zu der von Gregor Samsa.

Rotpeter berichtet, wie er durch die Nachahmung des Menschen sein Affentum hinter sich gelassen, die Menschensprache gelernt und „die Durchschnittsbildung eines Europäers erreicht“ habe: Der klassische Mimesis-Begriff von Aristoteles wird hierin durch die Demonstration erschüttert, dass das mimetische Vermögen auch einem Tier angeboren ist. Angenommen wird hier also, genauso wie bei Nietzsche, dessen *Genealogie der Moral* eine der Vorlagen für Kafkas *Bericht*-Text ist, eine gewisse Kontinuität zwischen Tier und Mensch, die sich im Moment des „Nachmachens“ zeigt. Daraus folgt, dass in der mimetischen Identifikation des Affen Rotpeter mit dem Menschen gerade ein Tier-Werden des Menschen enthalten ist: Bei seiner Bildungsgeschichte, die aber, genealogisch gelesen, auch die Geschichte einer Selbstdressur ist, geht es nicht um

eine teleologische Entwicklung eines niederen zu einem höheren Wesen, sondern um ein „Intensitätskontinuum“ (Deleuze/Guattari) des Werdens, in dessen Wirbeln kein Mensch-Werden des Tieres ohne das Tier-Werden des Menschen sich ereignet.

Rotpeters Nachahmung muss ferner auch als Mimikry begriffen werden: Durch die mimetische Bildung „schlägt“ er „sich in die Büsche“. Rotpeters gar nicht idealistische, eher als Selbstzucht bzw. Selbsttechnik einzuschätzende Bildung legt es auf eine strategische Anpassung zum Überleben an, die ihm einen „Ausweg“ aus dem Gitterkäfig eröffnet. Diesen Aspekt hat Max Brod vor dem historischen Hintergrund der sich assimilierenden Juden sofort verstanden. Mit seiner Mimikry steht Rotpeter für die andere Verwandlung, die trotz ihrer umgekehrten Richtung eine Auseinandersetzung mit der Macht repräsentiert.

In der anthropologischen Diskurstradition gilt eine strikte Unterscheidung von Mimesis und Mimikry, die an die von Mensch und Tier gekoppelt erscheint. Innerhalb des anthropologischen Diskurses würde man daher nicht mehr beurteilen können, ob Rotpeter, der eine paradoxe Doppelbewegung von Mimesis und Mimikry betreibt, Mensch oder Tier ist. Mit dem Bewusstsein von seinem Sonderstatus „berichtet“ Rotpeter „nur“, will aber dabei „keines Menschen Urteil“. Sein Bericht, der eine ganz bewusst nachträgliche Rekonstruktion der Lebensgeschichte repräsentiert, erhebt dennoch eine performative Fragestellung. Durch sein autobiographisches Sprechen vor der autoritären Instanz der Akademie provoziert Rotpeter als Rätselfigur den Leser zum Denken über die problematisierte Grenze von Mensch und Tier: Der Leser, der aufgrund der Textstruktur die Position des Akademiemitglieds einnimmt, soll sich je nach dem Stand des eigenen Wissens und Gewissens mit diesem Rätsel beschäftigen.